池田自然史博物館

◆ 続 ・ 頂 点 ◆

前回は、淀川で生態系の「頂点」に位置する猛禽類として『ミサゴ』を紹介しました。『ミサゴ』は主に『コイ科』や『ボラ』などの大型の魚類をエサとするため「魚鷹（うおたか）」の異名があります。
今回紹介する『チョウゲンボウ』も『ミサゴ』と同じく生態系の「頂点」に位置する猛禽類ですが、魚類ではなくネズミやモグラ、トカゲ等の小動物や小型鳥類、昆虫類などをエサにします。猛禽類の中では小型で、体長はオスで33cm、メスは38cm程度で、オスでほぼキジバト並みの大きさです。
かつては断崖の横穴や岩棚、樹洞に営巣していましたが、近年では都市部のビルや橋桁、高架道路などの人工物に営巣をしたり、ねぐらとする事が増えてきたようです。淀川中・下流域の河川敷や河川公園は、『チョウゲンボウ』の格好の狩りの場所となっています。堤防の脇に林立するマンションやビルにとまって“狩場”を眺めながら、獲物を見つけると一気に飛び出して急滑降しながら獲物を捕らえます。その場が安全であれば、捕らえた場所で餌を食べることもあります。
淀川の土手や河川敷を歩く機会があれば、堤防沿いのビルや、河川敷に生えている樹木等を注意して観察してみてください。もしかすると羽を休める『チョウゲンボウ』に出逢えるかもしれません。さらに運が良ければ、カップルでいる事もあります。その他『ハイタカ』や『ハヤブサ』などの猛禽類にも…。
一般的に『トビ』を除いて、猛禽類にはなかなかお目に掛かれないというイメージがあると思いますが、都会の中に広大な草地や河畔林などの環境を有する淀川には、上手に人間の産物を利用して猛禽類が棲息しています。





チョウゲンボウ
Falco tinnunculus



環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



7月に「神の木」を見た。樹液はそんなに出てないのに甲虫類が何十匹と密集し、まるで居酒屋状態。標本にする分を捕獲したが、3時間も経てば満員御礼。8月の終わり、もう一度訪ねてみた。森の中はツクツクボウシの鳴き声が響く。「ツクツクウォーシッ！　ウォシッ!」と徐々にテンポが速くなって、神の木への期待が高まる。だが、流行の時期は過ぎたようだ。神の木はシャッター商店街の静けさ。足元を見るとヤスデが這っていた。空中からはそろそろ繁殖期を迎えるスズメバチが威嚇。客層はすっかりと様変わり。同じ場所であっても、季節の移り変わりに伴って観察できる生物が違う。これって、多様性なんだろうな。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ 河川レンジャー 淀川管内 VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

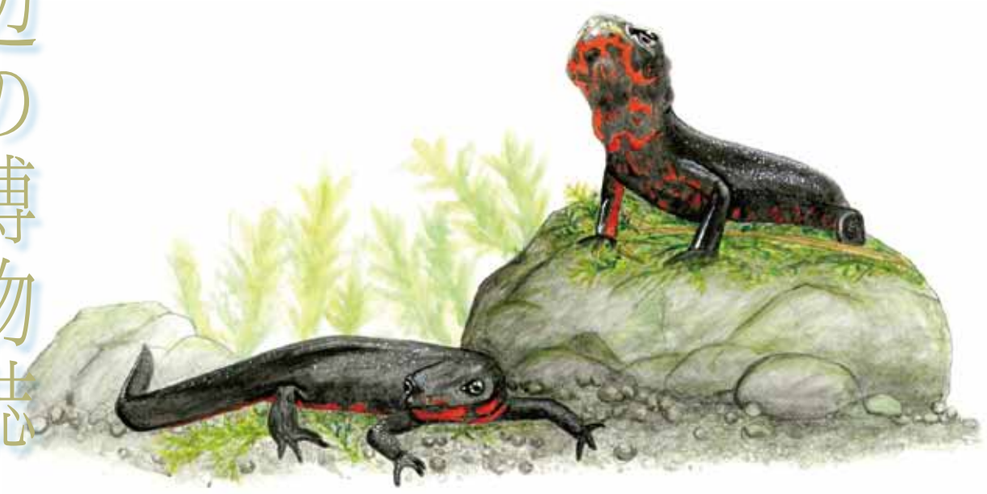
淀川自然画報

2015年9月号　No.15

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



フグ毒をもつ井の守り主

アカハライモリ　*Cynops pyrrhogaster*

ニホンイモリの別名がある日本固有種のアカハライモリは、サンショウウオに似ていますが皮膚がザラザラしていること、鮮やかな赤色と黒い斑紋の腹部で容易に見分けることができます。この派手な色は毒を有することを知らせる警戒色。フグ毒テトロドトキシンをもっているので、触れた後にうっかり目をこすったりしたら大変です。また、脊椎動物の中ではとくに再生能力が高く、切れた尾部は骨まで元に戻るほどです。名の由来は「井=水田」、井（イ）を守るからだと云われています。淀川水系の流入河川や平野部の水路で、かつては普通に見ることができましたが、今では里山を流れる川やため池でしか出会うことがありません。（画 / 三好智加）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

シマドジョウ

Cobitis biwae

シマドジョウは、コイ目ドジョウ科の仲間の日本固有の底生性の淡水魚です。山口県西部と四国南西部を除く日本各地に分布。水の清澄な湖沼や池、河川の中流域を中心に、地域によっては上流から下流域にまで広く生息しています。ですが、絶滅が危惧されるほど、生息数が減ってきている水域もあります。





派手な模様が
ひときわ目立つ



流れが緩やかな砂底や砂礫底の場所を好み、イトミミズやユスリカなどの動物性の餌やデトリタス、付着藻類などを食べる雑食性です。口には6本のヒゲをもち、体側には、円形や楕円形の黒色斑紋が縦に並んでみられますが、その大きさや形状などの斑紋のタイプは様々です。近年の研究で、従来のシマドジョウとされていたものが４種に細分されました。

バラエティに富んだ体側の美しい斑紋がみられることから、観賞用として人気が高く、あまり食用にはされてはいません。驚いた時などに、砂の中へ潜りこむ行動など、飼育すると様々な面白い行動がみられますので、ぜひ水槽で飼育してみてください。

under the water

the waterside

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

渡るタカ　サシバ

「鷹柱（たかばしら）」という言葉をご存じでしょうか。秋の季語にもなっているこの言葉は、日本で繁殖したサシバやハチクマなどのタカが、秋に南へ渡る時の飛び方を表現したものです。タカは上昇気流を利用して旋回上昇し、飛翔高度を高くしてから滑空していきます。滑空しながら少しづつ高度を下げ、また上昇気流を見つけて再び旋回し、高度を上げていきます。地上からの上昇気流は山の斜面で発生するため、それを利用するタカたちが集まってきて、多数のタカがクルクルと旋回している様子が柱のように見えるのです。多い時は数十～数百のタカが集まってきます。

９月～１０月、大阪の上空を多数のタカが通過していきます。多くは北摂山系の上昇気流を利用しており、淀川沿いに西へ滑空していく姿を観察することもあります。2014年秋の渡りでは、高槻市北部の萩谷総合公園での観測で7762羽のタカがカウントされました。萩谷での調査結果によると９月上旬はハチクマ、下旬はサシバ、１０月に入るとノスリの数がピークに達します。このカウント調査は全国的にボランティアによって毎年行われ、調査結果が蓄積されています。みなさんも良く晴れた秋の空を見上げてみてください。西へ一直線に滑空するタカの姿が見られるかもしれません。





大空を悠然と舞うサシバは
とてもカッコいい

写真提供 / 池田哲哉

★参考　タカの渡り全国ネットワーク
http://www.gix.or.jp/~norik/hawknet/hawknet0.html

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

イシビルの仲間

ヒルといえば、人の血を吸う（＝チスイビル）イメージをもつ方も多いと思います。淀川でも川底の石を裏返してみると石に吸着するヒルをよく見かけますが、そのほとんどは人には直接害のない（＝血を吸わない）イシビルの仲間のシマイシビルです。

本種は、雌雄胴体で、体色は茶~灰褐色、背面に黒色の縞があり、大きさは5㎝程度です。河川や水路などのやや汚濁した水域に棲んでおり、「水質階級III　きたない水」の指標種でもあります。また、水がなくなると川底に潜って生きることもできるようです。肉食性で魚類など大型生物の死骸や水生昆虫、イトミミズ類などを捕食することなどから、本種はバランスのとれた生態系を維持していく上で、生息を考慮する必要がある種ともいわれています。

淀川では本流やワンドの川底の石の裏を観察してみると、石に着いたイシビルを容易に見つけることができます。人の血を吸うことはありません。魚類等の死骸を食べてくれる川の掃除屋、イシビルの仲間をぜひ観察してみてください！

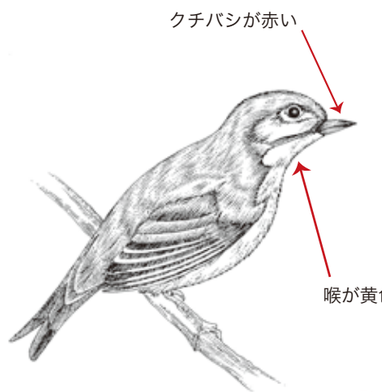


手の平にのせると這い回るが
水の中に戻すと体をくねらせて上手に泳ぐ

the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100



AN INVADER

チメドリ科　**ソウシチョウ**

Leiothrix lutea



淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧

全長約15cm。スズメより少し大きい。オスとメスで、大きさや羽色にほとんど違いはない。美しい姿や鳴き声を鑑賞するために、江戸時代頃からペットとして輸入・飼育されてきたと言われている。化粧品の「うぐいすの粉」の代用品として利用するため、大量飼育されていた事例もあるそうだ。だが、鳴き声が大きいという欠点がありペットとしての人気は降下。ペットとして飼っていたものが逃げたり、特定外来生物指定後に業者が逃がしたものなどが野外に定着。薮の中で営巣するメジロ、コマドリ、コルリ、ウグイスなど在来鳥類に影響を与える。最近では、北摂地域でもよく目撃されているそう。





一度見たら記憶に残る
緑に映える美しい彩り
その可愛らしさこそ罪である

写真提供 / 池田哲哉